

吸ふ息

酒井拓夢

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
余白には鳥と書かれて三島の忌 碎けゐて土器の還れぬ枯野かな 息白く汝の腑の熱をおもふなり 今川焼冷凍なれば皿に鳴る こゑことばしづみて雪のはやさかな 水鳥よひと俯きて傘をさす 鯛焼の粗き鱗を嗅ぎにけり 風呂洗ふ柚子の光を拾ひあげ 立ち止まる者なき駅の聖樹かな 二十代くづれて箸に喰ふ聖菓 星あたらし改稿に眼を焦がしては 読初や先づはひらきてふかく嗅ぐ バタと塩だけのパスタや春寒し 薄氷やたれも知らずにゐる言葉 醉へばものなべてまぶしき雪解かな 下萌や新譜はまたも愛のこと のどやかに貯水槽色褪せてをり ダンベルの確かな重さ春の峯 永き日をくぢらのやうにものおもふ 豆菓子の衣よろしき鳥の恋 音もなく落つるよ春手袋なれば あたゝかく枝みるひとを待つてをり 花冷や煤けてゐたる土器の渦	冬蝶の前世は栄かもしけず 付箋紙の厚みの匂ふ夏の雨 擊たれゐて水鉄砲のぬるさかな 扇風機まはりはじめの羽透けて 噴水のくづれてもなほみづ臭し 薄荷水めぐりて星の香のからだ 屋上のフェンス鑄びをり夏つばめ 手紙だしそびれてゐたるゼリーかな あをでは描けぬ清水とおもふなり ことなりて給水塔と百合の白 訣れかな青野に汝のこゑを伏し 冷されし牛より牛の色垂るゝ 獮猴桃に差し入るゝ匙夜の秋 貌よせて書けば涼しき果実かな レシートの溢れを压ふ夏の果 長濤にみちる微熱や鳳仙花 秋されて辞書選る腕の疲れかな 桃立たすシンクの縁に夜の来て 留守電は二件馬鈴薯切れば白 小鳥来る手紙になれぬものを書き 水澄みて明日もやあをき焜炉の火 『百年の孤独』秋黴雨の椅子に 冷やかや呼ぶときには吸ふ息さへも																							

50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26
ほのあをき世なり夜勤明けの桜 夏めきて重なる泡のすべてに吾 薄暑光図録の獸うつくしき 付箋紙の厚みの匂ふ夏の雨 擊たれゐて水鉄砲のぬるさかな 扇風機まはりはじめの羽透けて 噴水のくづれてもなほみづ臭し 薄荷水めぐりて星の香のからだ 屋上のフェンス鑄びをり夏つばめ 手紙だしそびれてゐたるゼリーかな あをでは描けぬ清水とおもふなり ことなりて給水塔と百合の白 訣れかな青野に汝のこゑを伏し 冷されし牛より牛の色垂るゝ 獮猴桃に差し入るゝ匙夜の秋 貌よせて書けば涼しき果実かな レシートの溢れを压ふ夏の果 長濤にみちる微熱や鳳仙花 秋されて辞書選る腕の疲れかな 桃立たすシンクの縁に夜の来て 留守電は二件馬鈴薯切れば白 小鳥来る手紙になれぬものを書き 水澄みて明日もやあをき焜炉の火 『百年の孤独』秋黴雨の椅子に 冷やかや呼ぶときには吸ふ息さへも	ほのあをき世なり夜勤明けの桜 夏めきて重なる泡のすべてに吾 薄暑光図録の獸うつくしき 付箋紙の厚みの匂ふ夏の雨 擊たれゐて水鉄砲のぬるさかな 扇風機まはりはじめの羽透けて 噴水のくづれてもなほみづ臭し 薄荷水めぐりて星の香のからだ 屋上のフェンス鑄びをり夏つばめ 手紙だしそびれてゐたるゼリーかな あをでは描けぬ清水とおもふなり ことなりて給水塔と百合の白 訣れかな青野に汝のこゑを伏し 冷されし牛より牛の色垂るゝ 獮猴桃に差し入るゝ匙夜の秋 貌よせて書けば涼しき果実かな レシートの溢れを压ふ夏の果 長濤にみちる微熱や鳳仙花 秋されて辞書選る腕の疲れかな 桃立たすシンクの縁に夜の来て 留守電は二件馬鈴薯切れば白 小鳥来る手紙になれぬものを書き 水澄みて明日もやあをき焜炉の火 『百年の孤独』秋黴雨の椅子に 冷やかや呼ぶときには吸ふ息さへも																							